

(4) 大学院研究科における教育方法等

(教育効果の測定)

○教育・研究指導の効果を測定するための方法の適切性 (B群) 大学院

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程 (前期)】

教育・研究指導の効果を測定するための方法の適切性

修士論文提出予定者は、提出年度の春学期(6月)と秋学期(10月)に行われる研究発表会において発表する機会が与えられている。この発表会には論文提出予定者のほぼすべてが参加し、論文指導教員以外の教員や他の大学院生からの質問や意見を得ている。

教育・研究指導の効果を測る方法としては、この発表会が最適であり、論文指導教員も積極的に関わっている。また、論文提出後には公開の修士論文発表会を行っており、ここでの発表は課程修了査定のための材料のひとつとして義務づけられている。

【文学研究科 英語英文学専攻 博士課程 (後期)】

教育・研究指導の効果を測定するための方法の適切性

博士課程 (後期) においては、教育・研究指導の効果を測定するために特にとっている方法はない。それらの効果の測定は、適宜行われる指導教授への研究経過の報告によって、ある程度は行うこともできるが、特に博士課程 (後期) の学生においては、論文を作成すること自体、また完成された論文の出来、不出来によって判断されるべきものと思われる。

したがって、学会における口頭発表や学術誌への論文投稿の回数をもって、教育・研究指導の効果を判断する材料としている。ただし、採用されないものであっても、口頭発表し、論文投稿すること自体、学生の研究への積極性を計る材料となるものと判断できる。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程 (前期)】

教育・研究指導の効果を測定するための方法の適切性

研究指導員の選定にあたっては、研究テーマを重視し、その内容の指導に最も適した教員を当てている。大学院生はその指導員の指導を受けながら、1年次には「研究計画書」の提出し、その発表会への出席が義務づけられている。

また、2年次には修士論文中間発表会が行われ、その参加も義務づけられている。

【文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程 (後期)】

教育・研究指導の効果を測定するための方法の適切性

研究指導員教員の選定にあたっては、学生の希望を尊重し、協議により各人の研究指導に最

も適した教員を当てるようにしている。

大学院生はそれぞれに研究指導員と相談しながら立案した研究計画とテーマに応じて授業を選択履修することができることになっている。

また、博士論文指導については、第1年次に「研究計画書作成」、第1年次修了時に「論文概要の提出」を行い、第2年次修了までに研究計画に基づく「中間論文の提出」を義務づけている。

こうした研究指導の有効性を客観的に知る手段は、指導学生の学会発表や学会誌への論文投稿の実績数によるしかないであろうが、その段階に至る教員の具体的な指導は個々人にまかされている。

【国際社会システム研究科 国際社会システム専攻 修士課程】

教育・研究指導の効果を測定するための方法の適切性

教育・研究指導の効果は、最も直截な形で修士論文に現れる。大学院第一期生の修士論文は、今後の発展可能性を伺わせるに充分であった。

こうした成果が継承できるような仕組みと評価体制の確立するために、たとえば修士論文中間報告会や完成後の報告会などを実施する予定である。

【生活科学研究科 食物栄養科学専攻 修士課程】

教育・研究指導の効果を測定するための方法の適切性

生活科学研究科は、食物栄養科学専攻に「食物栄養科学コース」と「臨床栄養学コース」の2コースをもっており、教育の方法はコースにより若干趣を異にしている。

「食物栄養科学コース」では、実験を中心とした指導体制をとっており、本学の小規模定員を生かして、“手作り教育”を目指して、1教授1学生を原則として、1年次より各研究室に配属し個別指導を行っている。研究テーマの選定を出発点として、実験計画、日常の観察力、テーマの展開性、発想力の涵養等を注意深く見守っている。研究過程における失敗例の検討方法、危険時の対処の仕方、危険物・廃棄物・廃液の処理方法等は場面に応じて適切に指導を行っている。

さらに、自己の研究テーマの位置づけを明確にするため、国際学術誌の読解能力を身につけるよう、基礎外国語力（特に英語力）を養うため、週に一回を原則として輪読を行ったり、名著の通読あるいは必要に応じて文献紹介の時間を設けている。文献紹介は発表方法を学ぶため一般に公開している。得られたデータの処理方法、結論の導き方、論文の書き方等に関しては徹底的にマンツウマン方式で指導し、ほぼ学会誌に投稿可能な程度に導き、その結果としてまとまりのある論文を最終的に仕上げることを目標としている。

この間、追試の重要性、他人の成果と自己の成果の厳密な区別といった倫理面での教育をしっかりと行う。最後に自己の研究成果の口頭発表の方法に習熟させ、研究者としての基礎的能力を養うことを大切にしている。生活科学研究科は博士課程を有していないことから、学生が

他大学院博士後期課程に進学可能な学力も併せて養えるよう努めている。

「臨床栄養学コース」の学生は1年次より連携先の総合病院の栄養科の指導を受けるべく配置し、実践的指導を受けさす。講義に関しては、十数人の専門医及び管理栄養士によるリレー形式で行い、社会人の条件も考慮して、主に夜間講義としている。いずれにしても、実践重視で、カルテの読める管理栄養士の育成を目標としており、その成果は、10例以上の症例報告の形で学生がまとめなくてはならない。

これらの「教育効果の測定」は、日常的な研究態度の観察と研究成果の中間報告を通して適切に行うことができ、個人の性格、能力等に応じて種々の対処が可能である点、生活科学研究科は有利な面をもっている。

「成績評価」に関しては、修士論文の製作過程における日常的評価と完成論文における前記教育目標の達成度の評価がすべてである。「教育・研究指導の改善」に関しては、上記のソフト面での充実度は、指導に当たる教員側の能力と情熱に依存するところが大きい。従って、教員自身の質的向上努力が前提となる。ただハード面に於いては、大型・精密機器等の充実度では、国公立大のそれと比較すると問題にならない程劣悪である。現段階では他機関の協力、助力を得て急場をしのいでいるが、本学の規模では止むを得ない点もあり、むしろ他機関との協力体制の充実に努める方が良いようにも思われる。

「教員の研究・教育指導方法の改善」に関しては、学部教員に準じて行っており、昇任人事等を通じて研究業績、教育能力、アドミニストレーション貢献度を三位一体として総合的評価し、必要に応じて、個人への改善勧告を行っている。

「学生による授業評価」あるいは「満足度」等に関しては、授業直後の教師—学生間の対話によって判定を行い、講義内容の変更等は臨機応変に行っている。「シラバス」には講義内容は明記しているが、学問の進歩による新しい論文の紹介など必要に応じて行うことにしている。いずれにせよ、修士課程のみの2年間という短さ、定員が少ないこと等、他の国公立の総合大学との格差は大きく、同じレベルでの教育は不可能であるが、逆に小規模・少人数の利点を生かした「手作り教育」に工夫を重ねている。

（成績評価法）

○学生の資質向上の状況を検証する成績評価法の適切性（B群）大学院

大学院の成績評価合格最低点数は70点としており、学部の60点より基準を上になっている。各科目の成績評価方法については、シラバスに記載することとし大学院生と教員間で成績評価についての共通認識ができるようにしている。

成績評価については、各教員の判断にまかされており、組織的な評価についての検討はしていない。個々の院生と授業の実態を知らずに、成績評価を行うことはできないものと考えている。

また、本学の大学院の場合、学生の資質向上に寄与する要素が指導教授によるところが極め

て大きいため、大学院および研究科単位での統一的な成績評価基準を設けることは困難である。

（教育・研究指導の改善）

○教員の教育・研究指導方法の改善を促進するための組織的な取り組み状況（A群）大学院

（財）大学コンソーシアム京都が主催するFDフォーラムに、各学部・学科より数名ずつの教員が参加し、教育方法の改善に関する意識を各学部・学科、各研究科・専攻にフィードバックすることとしている。

本大学院の場合、全ての大学院専任教員は各学部所属の教員により任用されているため、各研究科においてもフィードバックを行うこととしている。

○シラバスの適切性（A群）大学院

シラバスの記入方法も「開講テーマ」「授業目標」「授業計画」「授業方法」「評価方法」「教科書」「参考文献等」を明記する統一様式を設定し、「授業計画」については、回数毎に内容を明記するように担当教員に依頼している。

これにより、教員と学生が授業に対する到達目標を共有することが可能となり、学生の授業評価に繋がることが期待され適切である。

○学生による授業評価の導入状況（B群）大学院

導入していない。